



## 『城のある町にて』

詩人 長田 弘

思いだしてあの一冊と言えるのは、いまもこの一冊と言つことのできる、梶井基次郎の『城のある町にて』で、最初からいままで、少年の日に読んだときから、時が移り、歳がかさなっても、『城のある町にて』の湛えている澄んだ空気は、まったく変わらぬ。

いつ読みかえしても、叙述も、会話も、言葉の一つ一つがきれいに粒だつていて、その不思議な透明な触感に惹かれる。なによりも言葉がひらめいているのだ。

「奥の知れないやつな曇り空のなかを、きらりきらり光りながら過つてゆくものがあつた。」

鳩？

雲の色にぼやけてしまつて、姿は見えなかつたが、光の反射だけ、鳥にすれば三羽程、鳩一流のどこにあてがあるともない飛び方で舞っていた（ちくま文庫版）

原っぱに面した窓に倚りかかつて、主人公が外を眺めている。そのときの、その曇り空のなかを、「きらりきらり光りながら過つてゆくもの」のイメージが、その本で読んだだけに、実際に目の当たりにしたかのように、鮮烈に記憶のなかにのこっている。

少年の日に『城のある町にて』を読んではいじめて知つたのは、「気韻が生動している」ということがとても大事なのだということだ。以来ずっと、あらゆることについて、「気韻が生動している」かどうかということが、わたしの物事の判断の物差しになった。